

タイ語の語用論的小辞

高橋 清子

1. はじめに

語用論的小辞 pragmatic particles とは、真偽を問える命題レベルの意味一すなわち、動詞を核とする節によって表される事象の種類およびその動詞の項によって表される事象参加者の意味役割、文法役割の種類といった図式的な意味とそれらの意味に適合する語彙項目によって表される具体的、実質的な意味から成る出来事志向の意味一を超えた、真偽を問えない事実性認識、発話行為、談話構成に関する意味一すなわち、話し手志向の主観的 subjective な意味、聞き手志向の間主観的 intersubjective な意味、談話志向の文章構成的 textual な意味などを標示する小辞である。小辞 particles とは、本来、語形変化のある言語の語類の一種（語形が変化しない語類）を指す。したがって語形変化のないタイ語の語類の名称に使うのは不適切ではあるが、タイ語文法の分野でも小辞という用語が一般的に使われている。それに代わるよい名称がないこともあり、本稿でも語用論的小辞という名称を使う。タイ語には多種多様な語用論的小辞があり、特に話し言葉で多用される。タイ語話者は発話時の場面や心的状況に即して様々な語用論的小辞を使い分け、描写を鮮明にしたり描写に躍動感を与えたり何らかの含意や感情を添えたりして自らの発話を表現豊か expressive なものにし、聞き手の注意や関心を引き寄せ、聞き手の想像力や推論を喚起する。

本稿の目的は、タイ語の語用論的小辞の中でも特に発話単位の終わりに生起する小辞（これ以降、単純に「語用論的小辞」と呼ぶ）を扱った過去の主な論考（文法書や研究論文）を取り上げ、以下の3点について調査し、その結果を報告することである。第一に、各論考で語用論的小辞はどのように定義され、分類されて

いるか（第2節）。第二に、各論考で語用論的小辞の形式や意味機能の特徴についてどのような記述や説明がなされているか（第2節）。第三に、各論考の記述や説明にはどのような相違点があるか（第3節）。

2. 各論考の記述

本節では、タイ語の語用論的小辞に関する17の論考（書誌詳細は末尾の文献一覧を参照のこと）を出版年の古いものから順に紹介していく。語用論的小辞がどのように取り上げられ、その性質や特徴についてどのように論じられているのかを概観する。ここで、以下の小節の内容に関する留意点をいくつか挙げておく。語用論的小辞の分類とその主だった形式的、意味的、機能的特徴に焦点を当てて説明し、個々の語用論的小辞の詳しい意味記述については省略する。語用論的小辞の音形は、Peyasantiwong (1981)、Cooke (1989)、Pittayaporn and Chulanon (2012)の音韻分析を除き、便宜的にタイ文字で表記する。タイ文字で正確に表記できない特別な高音形、強調形、軽音節形などについては省略したり多少不正確に表記したりするところもある。前節で提示した筆者の語用論的小辞の定義に従えば、話し手と聞き手の関係を表す小辞も、質問に使われる小辞も、話し手の心的態度や姿勢を表す小辞も、すべて語用論的小辞と見なされるが、Iwasaki and Ingkaphirom (2000, 2005)で使われている用語「語用論的小辞」は筆者の定義より狭く定義され、話し手と聞き手の関係を表す小辞や質問に使われる小辞はその中に含まれていない。

2.1. อุปถัมภ์ศิลปสาร, พระยา (วิจารณ์ 1923, 1st ed.; หลักภาษาไทย 1992)

อุปถัมภ์ศิลปสาร, พระยา (1992: 85–86, 92–94, 107, 134)の語類には語用論的小辞に相当する語類はない。助動詞（他の動詞と共に起してその文法範疇の標示を助ける動詞）*จิ เถิด เถอะ เถอญ นะ เสีย* と修飾詞（他の語と共に起してその意味内容を新奇なものにする語、形容詞や副詞に相当する語類）*กระมัง* は「法 มาลา」標識に分類される。*จิ เถิด เถอะ*

เพอญ นะ เสีหฺ เป็น 「命令法 อาศัยนิมิตตา」 標識、กระมัง เป็น 「假定法 ปริกัปปมัตตา」 標識の中の「推量 ความคาดคะเน」標識である。ดอก เทียว ทีเดียว เจียว เป็น 「確定修飾詞 นิยมวิเศษณ์」、หรือ ใหม่ เป็น 「ปฏิเสธวิเศษณ์ 疑問修飾詞」(p. 63 には言及がないが、p. 107 に言及がある)、ไว้ จะ ชี้ จำ ชะ เข้า ขา เข้าทะ พระเจ้าข้า เพ็ชชะชะ พะชะข้า ปะชะ เพชะ ขอรับ ขอรับชม ขอรับกระหม่อม พระพุทธเจ้าขอรับ เป็น 「呼応修飾詞 ประดิษฐานวิเศษณ์」である。(กระมัง เป็น 修飾詞のどの下位分類に含まれるのかわからない。)

2.2. Noss (1964)

Noss (1964: 200–225) は語用論的小辞を、その多くが文(単一の音調で発音される、語や句などの統語単位から構成される節)に1つだけ生起するという理由で「文小辞 sentence particles」と呼び、「音調を除く、節の最終構成素となる、あるいは最終構成素の一部となる拘束形態素」と定義する。述部(主語以外の節構成素)全体に付加されるだけでなく、名詞表現、動詞表現などの内心構造(先頭の主要部が全体を代替し得る構造)の表現や、前置詞句、類別詞句などの統語的には内心構造表現の機能と並行する機能を持った外心構造(それに含まれるどの単一の語も全体を代替し得ない構造)の表現などにも付加される。文小辞は話し手の自らの発話に対する態度を表すが、その意味は話し手と聞き手の感情的な相互作用に大きく依存するものであり、実際の文脈を離れて解釈することは難しい。多くの文小辞は節音調によって、あるいは他の文小辞との共起によって様々に形を変える。単独でも生起するが、最大4つ共起することが可能である。最大音節数は4である。共起パターン内の生起位置によって4種類に分類される。

1. ร็อก 類。ร็อก ร็อก ดอก ร็อก, นะ, นี้ นี้, ไง, นะ เน็, ละ, มั๊, เอะ เด็ด。最初に生起する。特定の節構成素と関わりを持つという点で、列挙後置詞 enumerative postpositions (เศษ กว่า ละ เอง และ ไง นะ กั บ้าง ละ เถ่า นะ นี้ นี้ เนี้ นั นั นั นะ ละ ละ ว่า) に似ている。หรือ 類が後続しなければ強調形にはならない。

2. หรือ 類。หรือ เหรอ ร็ เอ็, ช็ ช็ ลี, นา นะ นะ, และ ละ เอะ, ละ เถ่า ละ, มั๊ มั๊。2番目に生起する。「聞き手からの反応を期待する」意味を表す。特定の節構成素と関わりを持つ

ແທລະ ເອອະ ເອອະ, ລະ ເຄ່າ ລະ を除き、文全体を修飾する。強調形を持つ。

3. ครับ 類。กระผม เข้าค่ะ ครับ อะ (เออ เออ)。3 番目に生起する。疑問形と陳述形がある。「聞き手との関係における話し手の地位を強化する」意味を表す。

4. นี่ 類。นี่ นี่ นั่น นะ。最後、4 番目に生起する。聞き手の意識を喚起するという点で、呼びかけ語 vocative の นี่ に似ている。

表 1 に文小辞の共起パターンを示す (例 : คุณไม่ไปกันจ้ะ หรือคุณหรือ. คุณนี่)。表の中の S は ครับ 類の文小辞が後続するときに陳述形になること、Q は疑問形になること、E はどちらの形にもなること、X はどちらの形にもならないこと、をそれぞれ表す。N は นี่ 類が後続可能であることを表す。

表 1 : 文小辞の共起パターン (Noss 1964: 218 の表から多少改変)

	หรือ QN	จ้ะ E	นา Q	ແທລະ S	ລະ Q	ນີ້ EN
รื้อก SN	รื้อกหรือ QN	รื้อกจ้ะ E	รื้อกนา Q			
นะ E	นะหรือ Q	นะจ้ะ E	นะนา X	นะແທລະ S		
นี่ E	นี่หรือ Q	นี่จ้ะ E	นี่นา X	นี่ແທລະ S		
เง E			เงนา Q		เงลະ Q	
ແທລະ S	ແທລະหรือ Q					
ລະ S	ລະหรือ QN	ລະจ้ะ E	ລະนา Q			ລະນີ້ EN
ນີ້ Q			ນີ້นา Q		ນີ້ลະ Q	
ເອອະ SN		ເອອະจ้ะ E	ເອອະนา X			

2.3. Haas (1964)

Haas (1964: xxii) は語用論的小辞を「小辞 particles」と呼び、文末語であるとす。例文で โหม หรือ เอะ ครับ อะ (โหม หรือ เอะ) を挙げている。法を標示する「モーダル小辞 modal particles」(โหม หรือ เอะ など) と、話し手と聞き手の関係におけるそれぞれの社会的地位や話し手の性を暗示する「地位小辞 status particles」(ครับ อะ อะ อะ อะ) など

の2種類に分類する。地位小辞は他の小辞と共に起るとき常に他の小辞に後続する。

2.4. Bhamoraput (1972)

Bhamoraput (1972) は語用論的小辞を「終結小辞 final particles」と呼び、タイ語の終結小辞の特徴として以下を挙げる。①文全体あるいは述部全体の意味を修飾する文末語である。②主要節および非主要節の後ろに生起し、通常は休止の前に生起する。③疑問や命令といった法を標示するものもある。④話し手と聞き手の性や社会的地位を暗示するものもある。⑤驚き、疑い、確信、親密さ、敬意、断言などの話し手の心的態度を示唆するものもある。生起する順番によって7種類に分類される。

1. 強意小辞 intensifying particles。จั่ง, นั้ก, เข้า, เสีย เสีย ซะ, ไป。
2. 強調小辞 emphasizing particles。ออก, หรอก คอก, แล้ว และ ละ, นะ, เลย, หน่อย, ที。
3. 勧告小辞 hortative particles。เขี้ยว เที้ยว, ฐิ ฐิ สิ ฐิ ฐิ, เกอะ。
4. 定小辞 definite particles。แหละ, หละ, นี้, แะะ。
5. 疑問小辞 question particles。ไหม มั้ย, หรือ รึ เรอะ เหรอ, ใช ไหม, หรือเปล่า, หรือยัง, นะ, นำ, กระมัง กะมัง ละมัง มัง。นำは疑問よりむしろ命令を表すが、統語的振る舞いが他の疑問小辞と同じなのでここに分類されている。
6. 疑問小辞に後続する小辞 post-question particles。เล่า ล่ะ。
7. 地位小辞 status particles。คะ, ค่ะ, ขา, ครับ, จ๊ะ, จ้า, ฮะ, ฮะ, ฮะ, วะ, เฮ้ย เว้ย พี่, เออ, เอ๋, เอ๊ย, หนอ น้อ。จั่ง เขี้ยว ไป เลย เสีย หน่อย เข้า ออก には、Haas (1964) では動詞あるいは副次的動詞に分類されている。しかし、動詞としての実質の意味が希薄化し、述部末に生起し、他の終結小辞との相対的位置が決まっているときは、それらは終結小辞として機能している。

表 2 : 終結小辞の共起パターン (Bhamoraput 1972: 44 の表から多少改変)

強意	強調	勧告	定	疑問	疑問後続	地位
จ้ัง	ออก		แหละ	ไหม		ครับ
น้ัก	หรือก		แหละ	หรือ		その他
	แล้ว		นี่	ใช่ไหม		
	นะ		แะ	หรือเปล่า		
				หรือยัง		
				กระมัง		
<u>ไป</u>	<u>เลย</u>	<u>เชิญ</u>		<u>นะ</u>		
<u>เสีย</u>	<u>หน่อย</u>	<u>ซี</u>				
	<u>ที</u>					
<u>เข้า</u>		<u>เถอะ</u>		<u>ม่</u>	<u>ได้</u>	

終結小辞の共起パターンは表 2 の通りである (例 : เขาก็ชอบ ไป เลย เชิญ แหละ นะ、รีบ เข้า หน่อย เถอะ นะ ละ、เขาก็ชอบ ไป เลย เชิญ แหละ ใช่ไหม นะ ละ)。表の中で下線が引かれていない小辞は、地位小辞を除き、陳述のみに使われ、命令には使われない。単線の下線が引かれている小辞は陳述にも命令にも使われる。二重線の下線が引かれている小辞は命令だけに使われる。แะ นำ には他の小辞が後続しない。

2.5. Warotamasikhhadit (1975)

Warotamasikhhadit (1975) は語用論的小辞を「終結小辞 final particles」と呼び、変形生成文法の分析手法を用いた分析例の中で ครับ ละ เจริญพร ถวายพระพรพระพุทธรเจ้าข้า เพคะ กระหม่อม ไว้ย คะ วะ หรือ ซี ซี ซี นะ を扱っている。異なるレベルの終結小辞が、①一人称代名詞の主語、②遂行的動詞 (典型的な遂行的発話において一人称単数直説法で用いられる動詞)、③二人称代名詞の間接目的語、を含む異なるレベルの遂行的文から派生すると説明する。第一の最も高いレベルの遂行的文が文の最も外側に生起する終結小辞 (例えば มันก็ดี ซี นะ ครับ ม่ ได้ ครับ では ครับ) を派生し、第二のレベルの遂行的文が外側から 2 番目に生起する終結小辞 (同、นะ) を派生し、第三のレベル

意味機能の観点から4種類に分類される。

1. 話し手と聞き手の関係性を表す類。 *ค่ะ ครับ อะ อะ อะ อะ อะ* など。
2. 聞き手の対応を要求する類。 *นะ จ๊ะ เอะ มื้อ หลอ น้อ* など。
3. 発話内容あるいは発話状況への話し手の対応を表す類。 *แะ อะ ละ มั่ง หลอก เอะ นะ นี จ๊ะ* など。
4. 発話場面の状況や談話文脈の指示に関わる類。 *ละ ละ หละ นะ เนะ นี เนี่ย ไ้* など。

基底形（声調の種類、母音の長さ、末尾の声門閉鎖音の有無が特定され、より基本的な意味を持つ形）から変異形（より派生した意味を持つ形）が派生されると考え、その過程として、①主要な音韻変化、②簡略（縮約）化、③付加的な音韻変化の3種類を想定する。音韻変異パタンの観点から文小辞は4種類に分類される。

1. 話し手と聞き手の関係性を表す *câ*類 (*kháp, háʔ, câ, khâ, hâ, yâ*)。例えば、基底形 *khâ*は「形式ばった丁寧な女性の発話」という基本義を持ち、変異形/*khâ*/は叙述、行動誘発のための発話に使われ、変異形/*khá*/は疑問表出、注意引き付け、応答のための発話に使われ、変異形/*kháa*/は親愛の情を表す発話に使われる。

2. *ná*類 (*ná, sí, wâ*)。例えば、基底形 *ná*は「聞き手の反応を望む」という基本義を持ち、変異形/*nâ*/は基本義に加えて「促し、もどかしさ」という意味も表す。

3. 平板声調の閉音節を基底形とする *thòʔ*類 (*làʔ, lèʔ, lòk, thòʔ, laʔ*)。例えば、基底形 *thòʔ*は「聞き手に望ましい反応を要求する」という基本義を持ち、変異形/*thóʔ*/は基本義に加えて「聞き手の不承不承を押し切る快活な主張、善意」という意味も表す。

4. その他 (*lě, maŋ, laman, nóʔ, máy, hé, nó, ní, ngay, lâ, nîʔ, nîa, nâʔ, nê*)。

2.9. พิณทิพย์ ทวยเจริญ (1991)

พิณทิพย์ ทวยเจริญ (1991) は語用論的小辞を「文末付加詞 หน่วยเสริมท้ายประโยค」と呼ぶ。文末付加詞を使うとき、その音韻特徴（律動、音の高低、音調、音の長短、声量、

強勢、声質、声門閉鎖音化など)の違いによって異なる心的態度が伝達されることを証明するために、音韻特徴の異なる *คำขึ้นต้น* *ไม่ขึ้นต้น* を含む会話文を被験者の学生に聞かせてその印象の違い(良い印象か悪い印象か)を筆記させる実験を実施した。文末付加詞には特定の音調(語レベルの音調、すなわち声調)がないため、音調の他に複合的韻律要素(高音声・低音声、強勢、声量など)も考慮に入れて分析した。音韻特徴の変異に従い、意味機能(話し手の心的態度についての被験者の解釈)も変異することが分かった。

2.10. Vonvipanond (1998)

Vonvipanond (1998) は *นะ ละ จิ เถอะ* などの語用論的小辞を、「sentence particles 文小辞、หน่วยเสริมท้ายประโยค 文末付加詞」ではなく、「discourse markers คำขึ้นประพจน์ 談話標識」と呼ぶ。談話標識は、①情報伝達課題(発話行為の種類:断定か、指令か、疑問か)、②話し手によって想定された聞き手の意識内における情報の有り様(活性化の状態か、半活性化の状態か、非活性化の状態か)、③発話内容や会話相手への影響に関する話し手の態度(説得的な態度か、親密な態度か、妥協的あるいは対抗的な態度か)を明示的に表すために使われる。*นะ นะ* は断定、指令、疑問を表し、*จิ จิ เถอะ เถอะ* は指令を表し、*ละ เถอะ* は断定を表し、*ละ* は疑問を表す。*นะ จิ* は想定された聞き手の意識内の情報が活性化された状態にあることを表し、*นะ ละ เถอะ ละ* はそれが半活性化された状態にあることを表し、*จิ จิ เถอะ เถอะ* はそれが非活性化の状態にあることを表す。談話標識の音韻的変異(音の高低、音節の長短、音節末の声門閉鎖音化)は話し手の心的態度の違いを以下のように類象的に表す。高音であればあるほど説得度が高い。音節が短ければ短いほど親密度が低い。開音節は妥協を表し、(末尾に声門閉鎖音を伴う)閉音節は対抗を表す。

2.11. เรืองเดช บินเขื่อนขันธ์ (1998, 1st ed.; 2011, 3rd ed.)

เรืองเดช บินเขื่อนขันธ์ (2011: 209–211) は語用論的小辞を「คำลงท้าย 末尾に添える語、末

尾語、final particles 終結小辞」と呼び、「見解や感情あるいは話し手と聞き手の関係性を表すために文に添えられる語」と定義する。終結小辞は、発話を丁重に響かせて耳触りのよいものにし、あるいは丁重ではなく耳触りの悪いものにし、発話に関する話し手の見解や感情、および性、年齢、社会的身分といった話し手と聞き手との関係を表す。タイ語の終結小辞は以下の特徴を持つ。①一定の確定した意味を持たない。②話し手の見解や感情の違いによって母音や声調が変異する。③多くの変異形を持つ。④通常、句末や文末に生起する。3種類に分類される。

1. 地位を表す末尾語 คำลงท้ายบอกสถานภาพ status particles。ค่ะ ละ ขา สะ สะ ครับ จะ ชี้ จำ ชะ ชะ ฟ้า ไผ่。
2. 気分を表す末尾語 คำลงท้ายบอกอารมณ์ mood particles。ล่ะ ละ ลำ เล้า นะ นำ ชะ ชะ หรือ ร็อก ดอก แผละ แล แต้ ัง ัง นี้ เนี่ย เลย ที่เดียว เขียว เขียว เขียว เขียว ชะ มั่ง กระมั่ง เสีย ชะ หน้อย ที่ ด้วย เอะ เถิด เอะ ชี ที ชี้。
3. 質問を表す末尾語 คำลงท้ายที่แสดงคำถาม question particles。หรือ เหรอ เหลอ หรือ เหรื่อ เอ้อ ไหม ไหม。

2.1 2. Iwasaki and Ingkaphirom (2000)

Iwasaki and Ingkaphirom (2000) は「語用論的小辞 pragmatic particles」(นะ นะ ละ (หละ) อะ เนี่ย (นี่นะ, นี้หละ) เนี้ย (ฮังนี้นะ, ฮังนี้หละ) ัง など) と「形式度標示小辞 formality-marking particles」(ครับ ค่ะ など) を機能の点で、すなわち、どのような社会的意味を直接的に表示するのかによって、区別する。「語用論的小辞」は認識と相互作用に関する意味を直接的に表示する。一方、「形式度標示小辞」は形式度と心的距離を直接的に表示し、会話の言語使用域を創り出す。語用論的小辞は直接的には形式度も心的距離も表示しないため、言語使用域創設への関与は薄い。語用論的小辞は言語使用域を創り出すのではなく、むしろ言語使用域を徴候的に示す。

2.1 3. Prasithrathsint (2001)

Prasithrathsint (2001) が扱っている語用論的小辞は ค่ะ ค่ะ ครับ ครับหม である。それらを「音素/kh/を含む丁寧小辞 /kh/ polite particles」と呼び、「統語論と語用論の

両方のレベルで同時に作用する談話標識」と定義する。それらの丁寧小辞は、「単独で生起したり、語、語群、節あるいは完結した文の後ろに生起したりし得る」という統語論的特徴と、「協議スタイル（見知らぬ者同士や表面的にしか知らない者同士で行われる商業取引や日常的活動における発話のスタイル、形式度が中程度のスタイル）で最も多く用いられ、個人間の意志疎通行為（情報の提供側と要求側に分かれてのやりとり）で丁寧さ、上品さ（整然としていること、淑やかで礼儀正しいこと、品行方正であること、柔和で優美であること）を標示する」という語用論的特徴を持つ。

2.1 4. Smyth (2002)

Smyth (2002: 126–137) は語用論的小辞を「文小辞 sentence particles」と呼び、3種類に分類する。

1. 疑問小辞 question particles。ไหม หรือ ใช่ไหม นะ หรือเปล่า หรือไม่ หรือยัง。発言の最後に加えてその発言を肯定否定疑問文に変える。

2. 丁寧小辞 polite particles。ครับ ครับผมค่ะ ค่ะ ขา สะ สะ จ๊ะ จ๋า ะ ะ ไว้ ยะ ะ พ่ะ ยะ ค่ะ เพคะ。聞き手に敬意を表したり、親密さや粗暴さを表したりする。

3. 気分小辞 mood particles。ด้วย ละ สะ นะ นะ นำ หน่อย ใจ หอคอก จี จี จี เกิด เถอะ เอะ ที などで。声調や母音の長さが異なるいくつかの変異形を持つものもある。書き言葉は実際の発音を反映しているとは限らない。

2.1 5. Iwasaki and Ingkaphirom (2005)

Iwasaki and Ingkaphirom (2005) は「発話レベル小辞 speech-level particles」（pp. 179–185）と「語用論的小辞 pragmatic particles」（pp. 187–211）と「疑問小辞 question particles」（pp. 279–289）を分けて記述している。

1. 「語用論的小辞」は様々な種類の非命題的、叙法的な意味内容（文内容や会話相手に対する話し手の姿勢）を表す。多くは文末に生起するが、名詞句末に生

起するものもある。語用論的小辞の生起は話し言葉に特徴的である。個人的な感情を自由に表現できる寛いだ普段の発話で多用される。発話レベル小辞、質問小辞に比べて数が多く、その意味機能はより曖昧模糊として捉え難い。音韻の変異が激しいことと形式、意味、機能に重複があることにより、その数を正確に捉えることは難しい。どのような発話行為タイプの文に生起するのかによって3種類に分類できる。

1.1. 一般小辞 **general particles**。นะ หนะ อะ, จี จี้ ลี, เอย, เขียว, เค็ย ซะ など。平叙文・疑問文、命令文に生起する。

1.2. 意味内容志向小辞 **information-oriented particles**。ล่ะ หละ อะ, แล่ะ อะ, หละ ละ อะ, หรอก หลอก ดอก, นี หนี, ไง, แนะ แทนะ, มั่ง ละมั่ง กระมั่ง など。主に平叙文・疑問文に生起し、命令文には生起しない。伝達する意味内容に対する話者の評価を表す。

1.3. 行動志向小辞 **action-oriented particles**。เถอะ เทยะ など。命令文だけに生起する。

2. 「疑問小辞」は肯定否定疑問文、付加疑問文の文末に生起する。มื่อ (ไหม), รีปล่า ลีปล่า (หรือปล่า), รีมัง ลีซัง (หรือซัง), รี เทรอ ลี เทรอ (หรือ) は肯定否定疑問文に生起し、ใช่ไหม ใช่หรือปล่า ไม่ใช่หรือ は付加疑問文に生起する。

3. 「発話レベル小辞」は文、節、句の後ろに生起し、話し手と聞き手の社会的関係性や発話場面によって決まる形式度を表す。よく使われる発話レベル小辞を表3に示す。形式度の高い ครับ นะ と中程度の อะ นะ ซะ は応答や相槌にも使われる。

表3：発話レベル小辞 (Iwasaki and Ingkaphirom 2005: 179 の表から多少改変)

話し手の性別	男	男・女	女
より形式度が高い	ครับ		นะ นะ
↑	อะ		อะ อะ
↓			จี้ะ จี้ะ
より形式度が低い		วะ เวัย โวย์	อะ อะ

2.17. Pittayaporn and Chulanon (2012)

Pittayaporn and Chulanon (2012) は語用論的小辞を「終結小辞 final particles」と呼び、その韻律的性質について論じている。終結小辞は、句末に生起し、様々な文法的、談話的、社会言語学的な意味内容を表す文法的形態素である。3種類に分類する。

1. 疑問小辞 interrogative particles (ไหม など)。肯定否定疑問を標示する。
2. モダリティ小辞 modality particles (จะ など)。話し手の内的知識（個人の経験に基づいた判断など）を表す。
3. 地位小辞 status particles (ครับ など)。性、社会的地位、談話参加者間の関係性を表す。

韻律音韻論の見地から、終結小辞を「音調接語 intonational clitics（音調句 intonational phrases に付加される接語）」と定義する。音調接語の生起位置は統語条件よりもむしろ韻律条件によって決まる。タイ語の音調接語は音調句（当該言語に特徴的な音調が発現する単位；タイ語では強勢が付与される最後の音節によって決まる、単一の音調を形成する単位）の右端にのみ生起する。韻律的構成素は、統語的構成素と同様、階層構造を成す。発話は音調句から成る。音調句は音韻句から成る。音韻句は音韻語（韻律語 prosodic words）から成る。

音調接語（終結小辞）は通常、典型的には強勢を伴わない軽音節（[kʰa][si][na][ca]など、単母音の開音節）だが、単独で生起したり焦点が当てられたりして強勢を伴うときは、タイ語には「単一の軽音節は（強勢を付与し得る）韻律語とはなり得ない」という韻律制約があることから、声門閉鎖音化や長母音化といった増強化が起り、軽音節が通常の音節に変わる（例：[kʰa] > [kʰa₂], [kʰa:]、[si] > [si₂], [si:]、[na] > [na₂], [na:]、[ca] > [ca₂], [ca:]）。こうした普通の語彙とは異なる音調接語の音韻的振る舞いは、音調接語が韻律的に不完全であること（韻律語ではないこと）に起因する。音調接語が付加される単位は、統語的には多様で定義し難いが、音韻的には一定した単位である。つまり、単一の音調

を形成する音調句である。音調接語には韻律語レベルの音韻現象である声調 lexical tones はない。あたかも声調であるかのような音韻現象は、音調接語が付加された音調句全体に関わる音調句レベル（韻律語レベルより高いレベル）の音韻現象である。

3. 比較考察

本節では、2.1 節～2.17 節で紹介した論考（①～⑰）の記述に見られる異同を考察する。語用論的小辞の分類、共起パターン、音形特徴の分析内容について比較する。

3.1. 分類

会話参加者相互の立場、親密度、会話の形式度などを表す小辞の分類については、単独で生起する種類をどう分類するかといった厄介な問題がないわけではないが、各論考の間に特段の相違点は見られない。おそらく、その下位分類の多くが「語用論的小辞同士の共起パターン内の最後の位置に生起する」という分かり易い統語特徴を共有し、「(聞き手への配慮である丁寧さや親密さの表明といった)典型的な聞き手志向の間主観的な意味を標示する」という比較的明確で区別し易い意味機能を有するからであろう。

疑問や質問を表す小辞の分類については、それを心的態度を表す小辞の下位分類とする論考（⑦）もあれば、下位分類とはせず、他と同等の心的態度を表す小辞として扱う論考（③⑤⑧）もある。しかし最も多いのは、心的態度を表す小辞とは別の種類として区別する論考（①④⑥⑪⑭⑮⑯⑰）である。そうした分類の違いは「question、interrogative、疑問」という概念の捉え方の違い、すなわち、認識・判断タイプとしての疑問（疑い、不確かさ）なのか、あるいは文タイプ、発話行為タイプとしての疑問（質問）なのか、に因るのかもしれない。認識・判断タイプの意味が核であると捉えれば、他の心的態度を表す小辞と同じ種類に分

類され、文タイプ、発話行為タイプの意味が核であると捉えれば、他の心的態度を表す小辞とは別の種類に分類される。これとは異なる考え方ではあるが、②は他の論考で同じ類とされている moo と mo を区別する。 moo は特定の節構成素と関わりを持つ moo 類であり、 mo は文全体を修飾する（聞き手からの反応を期待する） mo 類である。

心的態度を表す小辞の分類の仕方が様々である要因の一つとして、名称として使われている「mood、mode、 ma 」という用語の使い方が一様ではないことが挙げられる。これらの用語は、本来、「法」という文法範疇（文法規則に関わるカテゴリー、規則的に表し分けなければならない機能的意味の体系）を意味する。①③⑦では、タイ語にも法という文法範疇があるという前提で mood、mode (modal)、 ma を使っているが、⑥⑪⑭の論考では、mood を専門用語としてではなく「気分」という心的態度を表す一般的用語として使っている。一方、⑩が使っている「modality モダリティ」という用語は、文法範疇の枠組みにとらわれず、「話し手の発話時の発話内容（命題）に対する事実性認識・判断」という概念一般を表す用語である（ただし「modal」という修飾形になると文法範疇の概念か否かがはっきりしなくなる）。

心的態度を表す小辞が様々に分類される、より本質的な要因として、それらの小辞の語義を特定することは難しいという事実が挙げられる。本稿では詳しく紹介することができなかったが、心的態度を表す小辞の下位分類の仕方は各論考でかなり異なる。以下の点について各論考で考え方が異なるようだ。出来事志向の意味に関わる小辞（例：①の「確定修飾詞」、④の「強意小辞、強調小辞」、⑮の「意味内容志向小辞」）や、（質問以外の）発話行為に関わる小辞（例：②の「 ai 類」、④の「勧告小辞」、⑧の「聞き手の対応を要求する類」、⑮の「行動志向小辞」）などをどう扱い、形式的（音韻的、統語的）観点からも有意で妥当な分類をどのような形で体系的に提示しようとしているのか。聞き手志向の間主観的な意味の中でも特に主張、質問、応答、命令、依頼などの発話行為の意味は発

話場面や談話文脈に基づく語用論的推論を経て解釈される意味であることが多いが、心的態度を表す小辞の語義としてそうした意味を認めているのか。話し手志向の主観的な意味と聞き手志向の間主観的な意味の両方（例：疑いと質問、確信と命令）を語義として持つ小辞があると考えているのか。音節タイプや音調などの音韻特徴を多少異にする似た音形の心的態度を表す小辞が多数存在するが、何を基準に、どこまでが1つの小辞の変異形であり、どこから異なる別個の小辞になると判断しているのか。心的態度を表す小辞の音形の変異にはどのような意味機能の変異が結びついていると考えているのか。等々。

心的態度を表す小辞は数が多く、形式的にも意味的にも多様性に富む。それらの小辞をどれだけ細かく、あるいはどれだけ粗く分類するかは、結局のところ、どれだけ合理的かつ正確にそれらの小辞の使用実態を記述しようとするかによる。

3. 2. 共起パタン

具体的な共起パタンを示している論考は②④⑮だけである。語用論的小辞の分類の仕方が異なり、記述の抽象度や精密さも異なることから、それらのパタンは同じではない。どれが正しいのか（どれが実際の言語使用のあり方を最もよく記述し得ているのか）、それともどれも正しくないのか、よく分からない。どのパタンもそれぞれの論考の記述目的に合致したパタンなのであろう。共起する語用論的小辞の最大数の認定もそれぞれの論考によって異なる。②は4、④は7、⑤は3、⑮は6であるとする。

3. 3. 音形特徴

多くの論考が実際の発話における語用論的小辞の音形の多様さについて言及している。語用論的小辞の音形特徴の合理的記述やその音韻的変異の仕組みの一般化を目指している論考は⑧と⑰である。以下の点について両論考の主張は異な

る。語用論的小辞には構成音素が特定された基底形があるのか、そしてその基底形から派生形が生まれる過程を一般化できるのか。そもそも語用論的小辞には語レベルの音調（声調）があるのか、言い換えれば、語用論的小辞にかかる音調は語レベルの音韻現象か。

4. おわりに

以上、タイ語の語用論的小辞を扱った 17 の論考の記述内容を要約し、比較調査することによって、それらの異同を見てきた。タイ語の語用論的小辞は形式的にも意味的にも非常に多様で、容易くその語類の特徴を一般化したりその語類の体系を明示化したりすることはできないという事実を本稿の調査結果は示した。

本稿が紹介した論考の中で最新の論考は⑩である。「タイ語の語用論的小辞が付加される単位は（統語単位ではなく）音調句という音韻単位であり、だからこそ、それが生起する統語的位置を一般化することは難しい」という⑩の主張は合理的な主張である。タイ語の一般的性格として統語制約より音韻制約のほうが優位に働く傾向が強い（タイ語話者は「話し言葉」の豊かさを大切にすると筆者は考える。その性格がタイ語の語用論的小辞の振る舞いに顕著に反映されていると言えるのではないだろうか。

参考文献

〈英語〉

- Bhamoraput, Amara. 1972. Final Particles in Thai. Master's thesis, Brown University.
- Cooke, Joseph R. 1989. Thai sentence particles: Forms, meanings and formal-semantic variations. *Papers in South-East Asian Linguistics, No. 12: Thai Sentence Particles and Other Topics (Pacific Linguistics, A-80)*, 1-90. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Haas, Mary R. 1964. *Thai-English Student's Dictionary*. Stanford: Stanford University

Press.

- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2000. Creating speech register in Thai conversation. *Language in Society* 29: 519–554.
- Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom. 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Noss, Richard B. 1964. *Thai: Reference Grammar*. Washington, D.C.: Foreign Service Institute.
- Peyasantiwong, Ratcharin. 1981. A Study of Final Particles in Conversational Thai. Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- Pittayaporn, Pittayawat and Pirachula Chulanon. 2012. Syntactically naughty?: Prosody of final particles in Thai. In Miyamoto, Tadao, Naoyuki Ono, Kingkarn Thepkanjana and Satoshi Uehara (eds.) *Typological Studies on Languages in Thailand and Japan*, 13–28. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Prasithratsint, Amara. 2001. Syntactic distribution and communicative function of the /kh/ polite particles in Thai. *Journal of Language and Linguistics* 20.1: 11–23.
- Smyth, David. 2002. *Thai: An Essential Grammar*. London: Routledge.
- Vongvipanond, Peansiri. 1998. Phonological variation and attitudinal meaning: A case study of discourse markers in Thai. *Journal of Language and Linguistics* 17.1: 69–90.
- Warotamasikkhadit, Udom. 1975. Dependency of underlying structure and final particles in Thai. In Harris, Jimmy G. and James R. Chamberlain (eds.) *Studies in Tai Linguistics in Honor of William J. Gedney*, 342–354. Bangkok: Central Institute of English Language, Office of State Universities.

〈タイ語〉

- นวรรรณ พันธุ์เมธา. 2011, 6th ed. (1982, 1st ed.). *ไวยากรณ์ไทย*. กรุงเทพฯ: โครงการเผยแพร่ผลงานวิชาการ คณะอักษรศาสตร์ จุฬาลงกรณ์มหาวิทยาลัย.

- พิณทิพย์ ทวยเจริญ. 1991. บทบาทของหน่วยเสริมประโยคในภาษาไทย. *ภาษาและภาษาศาสตร์* 9.2: 2–12.
- เรืองเดช ปั้นเขื่อนขันธ์. 2011, 3rd ed. (1998, 1st ed.). *ภาษาศาสตร์ ภาษาไทย*. กรุงเทพฯ: โรงพิมพ์มหาจุฬาลงกรณราชวิทยาลัย.
- วิจินตน์ ภาณุพงศ์ และคณะ. 2009. *บรรทัดฐานภาษาไทย เล่ม ๓: ชนิดของคำ วลี ประโยคและสัมพันธ์สาร*. กรุงเทพฯ: สถาบันภาษาไทย สำนักวิชาการและมาตรฐานการศึกษา สำนักงานคณะกรรมการการศึกษาขั้นพื้นฐาน กระทรวงศึกษาธิการ.
- อุปกิตศิลปสาร, พระยา. 1992. *หลักภาษาไทย*. กรุงเทพฯ: โรงพิมพ์ไทยวัฒนาพานิช.

